

# 白い鳥

楠山正雄

青空文庫



むかし近江国の余呉湖という湖水に近い寂しい村に、伊香刀美というりょうしが住んでおりました。

ある晴れた春の朝でした。伊香刀美はいつものようにりょうの支度をして、湖水の方へ下りて行こうとしました。その途中、山の上にさしかかりますと、今までからりと晴れ上がって明るかった青空が、ふと曇って、そこらが薄ぼんやりしてきました。「おや、雲が出たのか。」と思つて、あおむいて見ますと、ちょうど伊香刀美の頭の上の空に、白い雲のようなものがぼつり見えて、それがだんだんとひろがって、大きくなって、今にも頭の上に落ちかかるほどになりました。

伊香刀美はふしぎに思つて、

「何だろう、雲にしてはおかしいなあ。」

と独り言をいいながら、じつと白いものを見つめていますと、それは伊香刀美の頭の上をすうつと流れるように通りすぎて、だんだん下へ下へと、余呉湖の方へと下つて行き

ます。やがてきらきらと、湖の上に輝きだした春の日をあびて、ふわりふわり落ちて行く  
白いものの姿がはつきりと見えました。それは八羽の白鳥が雪のように白い翼をそら  
えて、静かに舞い下りて行くのであります。伊香刀美はびっくりして、

「ほう、えらい白鳥だ。」

といいながら、我を忘れてけわしい坂道を夢中で駆け下りて、白鳥を追い追  
湖の方へ下りて行きました。やつと湖のそばまで来ましたが、もう白鳥はどこへ行つ  
たか姿は見えませんでした。伊香刀美はすこし拍子抜けがして、そこらをぼんやり見回  
しました。すると水晶を溶かしたように澄みきった湖水の上に、いつどこから来たか、  
八人の少女がさも楽しそうに泳いで遊んでいました。

少女たちは世の中に何にもこわいことのないような、罪のない様子で、きれいな肌を水  
の中にひたしていました。伊香刀美は「あッ。」といったなり、見とれてそこに立つてい  
ました。するとどこからともなくいい香りが、すうすうと鼻の先へ流れてきました。そし  
て静かな松風の音にまじって、さらさらと薄い絹のすれ合うような音が、耳のはたで聞  
こえました。

気が付いて伊香刀美が振り返ってみますと、すぐうしろの松の木の枝に、ついぞ見たこ

ともないような、美しい真つ白な着物が掛けてありました。伊香刀美はふしぎに思つて、そばへ寄つてみますと、美しい着物はみんなで八枚あつて、それは鳥の翼をひろげたようでもあり、長い着物のすそをひいたようでもありました。それがかすかな風に吹かれては、音を立てたり、香りを送つたりしているのです。

伊香刀美はその着物がほしくなりました。

「これはめずらしいものだ。きつとさっきの白い鳥たちがぬいで行つたものに違いない。するとあの八人の少女たちは天女で、これこそ昔からいう天の羽衣というものに違くない。」

こう独り言をつぶやきながら、そつと羽衣を一枚取り下ろして、うちへ持つて歸つて、宝にしようと思ひました。でも水の中に居る少女たちがどうするか、様子を見届けて行きたいと思つて、羽衣をそつとかかえたまま、木の陰にかくれて見ていました。

八人の少女たちはややしぼらく水の中で、のびのびときも気持ちよさそうに、おさかなのように泳ぐ形をしたり、小鳥のように舞う形をしたりして、余念なく遊び戯れていました。だが、やがて一人上がり、二人上がり、松の木の下まで来ると、てんでんに羽衣を取り下ろしては、体にまといました。そして一人一人、ぱあつと羽衣をひろげては、舞い上

がつていきました。

とうとう七人まで、少女たちはみんな白鳥になつて空の上に舞い上がりましたが、いちばんおしまいに上がつて来た八人めの少女が、見ると自分の羽衣は影も形も見えませんが、松風ばかりがさびしそうな音を立てていました。少女はその時、

「まあ、わたしの羽衣が。」

といったなり、あわててそこらを探しはじめました。もうその時には、仲間の少女たちは、七人とも空の上に舞い上がつて、見る間に、ずんずん、ずんずん、遠くなつていきました。

「まあ、どうしましょう。羽衣がなくなつては、天へは帰られない。」

と少女はくらい目をして、うらめしそうに空を見上げました。青々と晴れた大空の上には、ぼつん、ぼつんと、白い点々のように見えていた、仲間の少女たちの姿も、いつの間にか、その点々すら見えなほどの遠くにへだたつて、間には春の霞が、いくえにもいくえにも立ち込めていました。

「天にも帰られない。地にも住めない。わたしはどうしたらいいのだろう。」

と、羽衣をなくした少女は、足ずりをして嘆いていました。さつきからその様子を陰

でながめていた伊香刀美は、さすがに気の毒になって、のこのこはい出して来て、

「あなたの羽衣はここにありますよ。」

といいました。

だしぬけに声をかけられて、少女はびつくりしました。それから人間の姿を見ると、二度びつくりして、あわてて駆け出そうとしました。しかしふと伊香刀美の小わきにかかえている羽衣を見ると、急に生き返ったような笑顔になって、

「まあ、うれしい。よく返して下さいました。ありがとうございます。」

といいながら、手を出して羽衣をうけ取ろうとしました。けれど伊香刀美はふと羽衣をかかえていた手を、うしろに引ひ込めてしまいました。

「お気の毒ですが、これは返すわけにはいきません。これはわたしの大事な宝です。」  
 といいました。

いったん気の毒になって、羽衣を返そうと思つた伊香刀美は、急にまたこのきれいな少女が好きになつて、このまま別れてしまうのが惜しくなつたのでした。

「まあ、そんなことをおっしゃらずに、返して下さいまし。それが無いと、わたしは天へ帰ることができません。」

と少女はいつて、はらはらと涙をながしました。

「でもわたしはあなたを天へ帰したくないのです。それよりもわたしの所へおいでなさい。いつしよに楽しく暮らしましょう。」

と伊香刀美はいいました。そしてずんずん羽衣をかかえたまま向こうへ歩いていきました。少女はしかたがないので、悲しそうな顔をして、後からついていきました。

少女は羽衣にひかれて、とうとう伊香刀美のうちまで行きました。そして伊香刀美といつしよに、そのおかあさんのそばで暮らすことになりました。でも始終どうかして天に帰りたいと思つて、折があつたら羽衣を取り返して、逃げよう逃げようしました。伊香刀美も少女の心を知つていたので、羽衣をどこかへしまったまま、少女の目にはふれさせませんでした。少女は毎日のように空をながめては、人しれず悲しそうなため息をついていました。

## 二

そうこうするうちに三年たちました。



ある日伊香刀美は、いつものように朝早くのように出かけました。少女は伊香刀美のお

かあさんといろいろ話をしていて、ふとおかあさんが、

「まあ、お前がここへ来なすつてからもう三年になるよ。月日のたつのは早いものだね。」  
 といいました。少女はそつとため息をつきながら、

「ほんとうに早うございますこと。」

といいました。

「お前、今でも天へ帰りたいだろうね。」

「ええ、それははじめのうちはずいぶん帰りとうございましたが、今では人間の暮らしに慣れて、この世界が好きになりました。」

と答えながら、何気なく、

「そういえば、おかあさん、あの時の羽衣はどうなったでしょうね。あれなり伊香刀美さんにおあずけしたままになつておりますが、長い間にいたみはしないかと、気にかかります。おかあさん、あの、ちよいとでよろしゅうございますから、見せて下さいませんか。お願いです。」

といいました。

おかあさんは伊香刀美から、どんなことがあつても少女に羽衣を見せてはならないと、かたくいいつけられていましたから、強く首を振つて、

「それはいけませんよ。」

といました。

「なぜ、いけないのでしょうか。」

と少女は子供らしい目をくりくりとさせて、さもふしぎそうにたずねました。

「だつて羽衣を見せると、それを着て、また天へ帰つてしまふでしょう。」

「まあ、わたくし、人間の世界がすっかり好きになつたと申し上げたではございませんか。おかあさん、お願いです、ほんの一目見ればいいのですから。」

と、少女はしきりとおかあさんに甘えるように頼んでいました。そのかわいらしい様子を見てみると、おかあさんは、何でもそのいうとおりにしてやらなければならぬような気がしてきました。

「ではほんのちよいとですよ、伊香刀美にはないしよでね。」

とおかあさんはいいながら、戸棚の奥にしまつてある箱を出しました。少女は胸をどきつかせながらのぞき込みますと、おかあさんはそつと箱のふたをあげました。中からはぶ

んといいい香りがたつて、羽衣はそっくり元のままで、きれいにたたんで入れてありました。

「まあ、そっくりしておりますのね。」

と少女は目を輝かしながら見ていましたが、

「でも、もしどこかいたんでいやしくないかしら。」

というなり、箱の中の羽衣を手に取りました。そしておかあさんが「おや。」と止めるひまもないうちに、手ばやく羽衣を着ると、そのまますうつと上へ舞い上がりました。

「ああ、あれあれ。」

と、おかあさんは両手をひろげてつかまえようとなりました。その間に少女の姿は、もう高く高く空の上へ上がって行って、やがて見えなくなりました。

帰って来て伊香刀美はどんなにがっかりしたでしょう。三年前に湖のそばで少女がしたように、足ずりをしてくやしがりしましたが、かわいらしい白い鳥の姿は、果てしれない大空のどこかにかくれてしまつて、天と地の間には、いくえにもいくえにも、深い霞が立ち込めたまま春の日は暮れていきました。



# 青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 白い鳥

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>